巻頭特集

ボクシング

見据えるは世界の頂

田中亮明・恒成兄弟

多治見市市之倉町出身の兄弟ボクサー、兄・田中亮明選手、弟・恒成選手。
2020年は2人にとって、節目といえる1年だった。
亮明選手は東京五輪男子フライ級日本代表として内定、
恒成選手は世界最速16戦目での4階級制覇に挑戦。
開催が間近に迫った東京五輪を前に、この2つの出来事を
振り返ってもらうと、
夢を実現するための
ヒントが見えてきた。

技術面においては、亮明選手からアドバイスを貰いっぱなしだったと語る恒成選手。「五輪に向けて自分にできることはしたい」と、その都度気づいたことを指摘したという

恒成選手が所属する畑中ボクシングジムで汗を流す。恒成選手が通うKBSトレーニングジムにも足を運び、恒成選手と同様のメニューをこなして、フィジカル面の強化に励んだ

弟からの刺激を糧に 集大成として挑む五輪

10年前の2011年、こう語る兄弟がいた。

「まずは優勝して日本一強い選手に。次の目標はオリンピック選手です」

「高校卒業後は、プロを目指す」

兄の名前は田中亮明選手、弟は恒成選手。当時高校生だった2人は、言葉通りアマチュアとプロに分かれ、日本ボクシング界を牽引する若きスター選手となった。

2020年3月20日、亮明選手は東京五輪の日本代表として内定を得た。ついに夢が叶ったその時の心境を、亮明選手は「もちろんうれしかったですが、ホッとした気持ちの方が大きかったですね」と振り返る。

母校である中京高校で教鞭をとりながら、五輪へ挑戦するのは今回で2度目。2015、2016年と全日本選手権を2連覇し、国内最強の座を揺るぎないものにして臨んだリオ五輪の代表争いでは、世界最終予選で敗れ出場を逃していた。ホッとしたという気持ちの裏には、今までの努力が報われたという安心感があった。

代表内定のわずか4日後には異例の五輪延期が発表されるも、動揺はなかった。

「1年間メダルを取れる準備ができるなら、それでいいかなって」

五輪出場の夢を叶えた亮明選手が次に見据えたのは金メダル。思いがけず生まれた1年の猶予を有効に活用しようと、恒成選手に助力を頼んだ。モチベーションの維持と、相手と一定の距離をとって戦うボクシングスタイルの見直し、フィジカル面の強化と、自ら課した問題点は山積み。そのために接近戦を得意とする恒成選手と練習を共にし、恒成選手のトレーナーを務める父・斉さんに指導を仰いで、自らを徹底的に追い込んだ。同じく世界と闘うボクサーながら、それまで兄弟が一緒にトレーニングする機会はほとんどなかったというから、その決意の重さが伺える。

田中亮明（りょうめい）選手

1993年生まれ。5歳から空手、12歳からボクシングを始める。駒澤大学3年生まで国体4連覇。2015年、2016年、2019年と全日本選手権で優勝。現在は中京高校の社会科教諭とボクシング部の監督を務める。東京五輪男子フライ級日本代表

2011年、国体の開催を前に取材した当時の2人は、中京高校ボクシング部に所属する高校3年生と1年生。亮明選手はフライ級、恒成選手はライトフライ級に出場し、国体ボクシング初の兄弟優勝を飾った

間近で刺激を受けあう中で亮明選手が感じたのは、恒成選手のパンチの威力、速度、そしてそれを生み出すフィジカルの強さ。「勝つためにはどうすればいいのか?」。トレーナーと話し合い、勝利に貪欲であろうとする姿勢にも、得るものがあった。

五輪開催予定日までいよいよ1カ月を切った。5月にロシアで行われた約1年2カ月ぶりの国際大会での経験を経て、現在は事前合宿のさなかで、そのまま選手村に入る。

「負けたとしても、どうってことはないし、メダルを取りたくて1年頑張ってきたので、今は楽しみの方が大きい。ただ、選手人生の集大成にはなるので、ただでは終わらないという気持ちです」

敗北をチカラに 新たな武器で再起をかける

一足早くプロになる夢を叶え、世界最速タイのプロ12戦目で3階級制覇を達成していた恒成選手にとっても、転機の1年だった。大みそかに行われたWBO世界スーパーフライ級タイトルマッチは5階級制覇の夢に向かう大一番。相手は王者・井岡一翔選手。同級1位の挑戦者として挑んだ恒成選手は、2度のダウンを奪われ、8回TKO負けを喫した。

自身最長となる丸1年のブランク、キャリア初となる階級転向後、ノンタイトル戦なしのぶっつけ本番と、コロナ禍という特殊な状況ゆえに、万全な状態ではなかったのではないかと感じた読者は少なくないはずだ。恒成選手自身、気持ちを切り替えて、実際に前を向けたのは2月に入ってからだというが、「後悔は一切ない」と語る口調に迷いは一切感じられなかった。

「プロボクシングで一敗ってめちゃめちゃ大きいので、負けるとかあんまり考えたことないんですけど、これで負けたらしょうがないって思えるくらいに準備して臨んだ。試合中の判断にも悔いはなく、すべて出し切った結果です」

プロ初の黒星から半年。現在は新しいボクシングの形を構築している最中だ。再起のテーマは、ディフェンスの強化と速度に頼らなくても攻撃を当てられる技術。これまでスピードの速さと手数の多さで勝利をもぎ取ってきた恒成選手にとって真逆のスタイルだが、新旧の強みが上手く組み合わされば、その可能性は計り知れない。

「ひとつの敗北で精神的に崩れていく選手は、そこから強くなる選手よりも多い。負けて強くなれるわけでは決してないんです。でも負けたからこそ、ここまで思い切って踏み切れたともいえます」

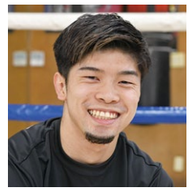
負けない人から、負けても這い上がれる人へ。敗北を糧にできたかどうかの答え合わせは、恒成選手が再びリングに上がる日まで持ち越しとなる。

「覚えていますか?」と、高校生の頃の取材記事を2人に見せた。誌面には、今月号の表紙同様にファイティングポーズをとる姿。10年前口にした夢を改めて読み返す2人の瞳には、懐かしさが宿っていた。

「夢を言葉にしてほしい。そうすると、少なからず責任感が生まれて頑張ろうって気持ちになる。『こういう協力してあげるよ』って、自分だけじゃなく周りの人を変えられたり、力を貸えたり、いろんな良いことがきっとあるはずです」

有言実行を体現してきた2人の言葉には、夢に向かって努力するすべての人にとって役立つであろうヒントが詰まっていた。

世界の頂からは、一体どんな景色が見えるのだろう。夢を実現した2人にまた会える日が楽しみでならない。



田中恒成（こうせい）選手

1995年生まれ。空手の技術向上のため、亮明選手と共にボクシングを習い始める。中京高校在学時に全国4冠を成し遂げ、高校3年生でプロデビュー。中京大学在学時の2015年、日本最速記録で世界王座を獲得。翌年に2階級制覇、2018年には3階級制覇を達成した

地元後援会の発足に感謝の言葉を口にする2人。「自分たちもボクシングでパワーを与えていきたい。ボクシング以外でも、何か貢献できれば」と笑みを見せた

読者限定
2人の直筆サイン色紙を抽選でプレゼント

下記必要事項を記入のうえ、
メールまたはFAXにて応募ください。
必要事項
・応募者の氏名 ・住所 ・電話番号
※7月号巻頭特集プレゼントと記入ください
応募先
MAIL oribe@chuco.co.jp FAX 0572-24-2120
応募締切 7月10日(土)
QRコードからメールを起動!

文／髙﨑千紗登　写真／田中貴久　デザイン／chica